



タイムマシンにおねがい

[目次へもどる](#)

第1回 2001年にはじまる

「治療技法論」(2012～) → 「心的構造論」(2003～2011) → 『人形の身体論—その精神分析的考察』(2001～2002) → 「新世紀人形展」(1999)



学習院大学百周年記念会館

第0回から

『人形の身体論—その精神分析的考察』第0回は、2001年5月30日水曜日午後6時から8時、東京・目白の学習院大学百周年記念会館会議室で開催された。目白の駅前から横断歩道を渡るとすぐ学習院大学の通用門。深い緑に囲まれた散歩道をしばらく歩くと会場に着く。5月の終わりでもあり、開始時間はまだ十分明るく、広い窓の外はまるで森のなかにいるかのような緑が広がっている。そんな都心の自然のなかで第0回は始まった。この日、講師の藤田博史氏は、風邪で高熱があったが、そのことはスタッフ以外には知らされることはなく、多くの人形作家や人形愛好家が訪れるなか、盛況のうちに無事に初回を終えた。のちに2006年に青土社より『人形愛の精神分析』として出版されることになるこの記録は『人◇形◇愛の精神分析』というタイトルで『ドール・フォーラム・ジャパン』誌に2003年9月号まで2年にわたって講義と同時進行で連載された。2001年9月号(写真下)の連載第1回には、第0回のプロローグと第1回の「眼と眼差し、あるいは視的欲望」が掲載された。当時の雰囲気的一端をお伝えするために、ここでは単行本には収録されていない編集者による巻頭言を紹介しておこう。



タイムマシンにおねがい・別館

[サイトはこちら](#)

公開セミナー『人形の身体論—その精神分析的考察』

[サイトはこちら](#)

『人形愛の精神分析』紹介・青土社公式サイトより

[サイトはこちら](#)

ドール・フォーラム・ジャパン公式サイト

[サイトはこちら](#)

学習院百周年記念会館・学習院公式サイト

[サイトはこちら](#)

早稲田奉仕園公式サイト

[サイトはこちら](#)

押井守公式サイト ガブリエルの憂鬱

[サイトはこちら](#)

the special world of mario ambrosius 亜 真里男 MarioA

[サイトはこちら](#)

<今号から始まるこの連載は、DFJ主催で2001年5月より毎月1回行われている精神分析医、藤田博史氏による連続公開セミナー「人形の身体論—その精神分析的考察」より、人形に密接に関わる箇所を中心に、採録、編集したものです。セミナーは、1回2時間、前半は藤田氏による講義、後半は参加者との質疑応答、コンサートに喩えるならば前半は藤田氏によるソロ・インプロヴィゼーション、後半は、トーク・セッションの趣で行なわれております。字数も限られているこの連載の中で、その全容、そのライブ感をお伝えできないことは大変残念ですが、この連載が、精神分析を通して人形について、あるいは人形を通して精神分析について考察する一つのきっかけになることを願っております。> (『ドール・フォーラム・ジャパン』第30号 2001年9月発行より、「人◇形◇愛の精神分析」p8)

第1回から

『人形の身体論—その精神分析的考察』第1回は東京・早稲田にある早稲田奉仕園50人ホールで、2001年6月26日午後7時~9時に開催された。会場は早稲田大学の文学部の道路をはさんで向かい側。学生街のにぎやかな雰囲気、背を向けて、急な坂道をしばらくあがっていくと、静かな一画がそこには広がっていた。



早稲田奉仕園

さて、人形愛のセミナーの第1回目のテーマは「眼/眼差し、あるいは視的欲望」である。



第一回講義写真

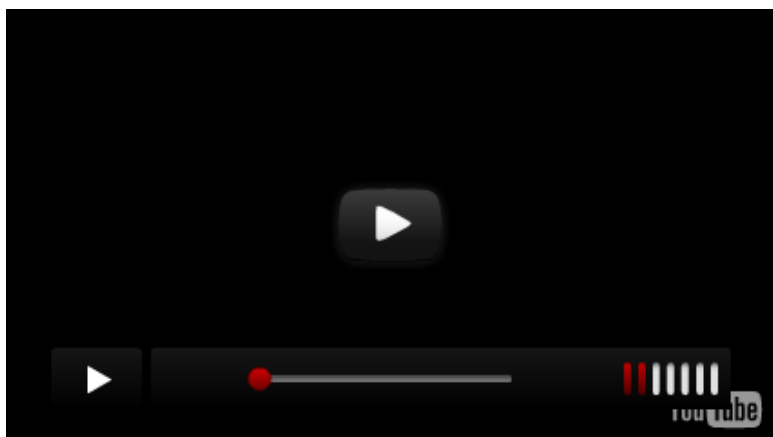
聴講者は精神分析に興味のある人だけではなく、創作人形作家や人形のファン、写真家、アーティスト、文筆家、編集者など多彩な顔ぶれである。なかでも第1回から熱心にこのセミナーに参加していたのが、アニメーション映画監督の押井守氏であった。押井氏はその頃、次作の準備のために人形についてリサーチしており、忙しいスケジュールのなか可能な限りこのセミナーに出席した。下記の写真で、マイクを持って発言しているのが押井守氏である。



第一回講義写真 (質問者は押井守氏)

押井守氏がその時準備していた作品こそ2004年に公開された『イノセンス』である。その冒頭部分は以下のyoutubeの映像でご覧いただくことができる。ハンス・ベルメールの球体関節人形写真や球体関節人形の仕組みをご存知の方なら、そこにリアルな人形が再現されているのを目の当たりにすることができようし、この映像の最後に登

場する、カットと見開かれる目とその眼差しの表現も、セミナーのテーマと併せて考えてみると、あらためて興味深く思われてくるのではないだろうか。



映画『イノセンス』参考映像

また講師の藤田博史氏の発案により、会場写真は毎回出席者の1人をお願いしていた。この第1回公開セミナーの会場写真を撮ったのが、アーティストのマリオ・A氏である。

彼は2001年1月に『ma poupée japonaise』という写真集を出版したばかりであった。ここでは、当時『ドール・フォーラム・ジャパン』誌に掲載されたこの写真集の書評を[「タイムマシンにお願い・別館」](#)に再録しておく。



『ma poupée japonaise』

これは生身の日本人女性を球体関節人形に模するという大変興味深い試みによる写真集で、自らも球体関節人形に興味を持っていたマリオ・A氏は、このセミナーの常連として出席、その発言の一部はのちに『人形愛の精神分析』にも収録されることになる。

さて、第1回の講義では、ラカンの「四つの基本対象」を巡って精神的に興味深いテーマがコンパクトにわかり易く述べられているが、詳しくは単行本でご覧いただくとして、ここでは、人形制作の秘密に関わる講義内容を引用して、今回の締めくくりとしたい。

くこういうことを前提において人形のことを考えてみるに、人形作家の方たちに雑誌『ドール・フォーラム・ジャパン (DFJ)』のアンケートで、人形制作において、あなたが一番力を入れているところはどこですかと尋ねたところ、「眼」と答えた人が圧倒的に多い。そういう製作の立場にある芸術家とか人間の存在の根本に立ち返って仕事をしている人たちは、眼が見る器官ではなく見られる器官だということを薄々気がついているのですね。つまり自分がどうして人形を作るのかというと、ひょっとしたらその人形に見られたいのかもしれない。自分を見てくれる「眼差し」をそこに再現するために人形を作っている、という可能性が想像されるわけです。

眼をつくりたいがために残りの身体部分が生じてくるというような人形の作り方もあると思います。何か自分が作るものの中に眼差しを盛込まないと、自分の創作活動とか、自分の存在が危うくなるようなところで仕事をしている人たちがいるのだと思います。そういう意味で眼差しとか眼が重要になってきます。

人形の眼でも、描いて終わりという眼もあればガラス細工で精巧に作られた眼もありますが、あれは眼という器官であると同時に、眼差しという機能でもある。その眼差しを再現する作業が精神分析の仕事のひとつであり、人形作

つづく

PAGE TOP 

[目次へもどる](#)

=====

精神分析医 藤田博史による
公開セミナーの予告と記録
SEMINAIRE OUVERT PERMANENT
avril 2012
『セミナー通信』Webマガジン版
2012年4月発行 「セミナー通信 復刊第4号 2012年4月号」
発行 ユーロクリニック文化部 EUROCLINIQUE Division Culturelle
編集 ユーロクリニック文化部 榊山裕子
Tel:042-308-7637 E-mail: ys@euroclinique.com

=====

Copyright 2011-2012 EURLCLINIQUE Division Culturelle. All Rights Reserved.